

「技法と用具の映像資料」のご案内

光村図書ウェブサイトには、教科書紙面だけでは捉えにくい具体的な表現技法や用具の使い方を紹介した動画を掲載しています。

にじみ・ぼかし・吸い取り・かすれなどの「水彩の技法」、明朝体を書く「レタリングの手順」、針金を加工する基本的な方法、「滑石で彫刻をつくる際の基本的な加工方法」の5点です。

用具を使っている手をクローズアップしたり、手順やちょっとしたコツを音声でも解説したりしているので、初めて取り組む生徒たちにもわかりやすい内容になっています。いずれも5分程度でコンパクトにまとまっており、授業の導入の際に電子黒板やプロジェクタなどを使って、生徒に具体的なイメージをもたせることができます。

これらは、中学校美術教科書の巻末「学習を支える資料」に対応しているので、教科書と見比べることによって、ポイントをしっかり押さえさせるのに役立ちます。

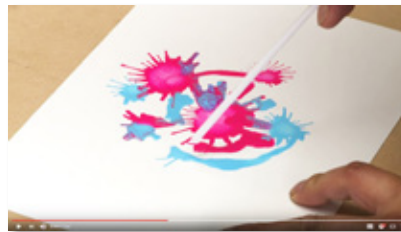
中学校美術「学習指導書」には、上記の動画を含む計40点の動画が収録されています。

『中学校美術 学習指導書 1』
本体価格 28,000円+税

『中学校美術 学習指導書2・3』
本体価格 54,000円+税



水彩の技法 にじみ・ぼかし・吸い取り・かすれ(3分45秒)



吹き流し(1分52秒)



レタリングの基本(5分26秒)



針金でつくる(4分28秒)



石彫の基本(4分22秒)

この動画は、「光村図書ウェブサイト>中学校美術>技法と用具の映像資料」からご覧いただけます。

美術準備室 No.11

2017(平成29)年4月14日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話 : 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



アトリエ訪問
建築家
安藤忠雄

作家の肖像
彫刻家 **佐藤忠良**

放課後ART
● 埼玉県上尾市立
西中学校
● **アートでオン!** (青森県青森市)

この1点
「**火焰土器**」
片桐仁

特集

発想や構想の力を育てる

ア ト リ エ
訪 問

第 11 回

安藤忠雄

建築家

「大阪に育てられた建築家」と、自身を語る安藤忠雄。
元プロボクサーで、独学で建築を学ぶという異色の経歴をもつ。
そんな建築界の異端児を、大阪の人たちはおもしろがり、
無名時代から仕事を依頼して、世界へ羽ばたかせた。
彼は今日も、大阪から世界をにらみ、建築の新しい可能性を発信し続ける。

撮影 伊東俊介

大阪・梅田からほど近い住宅街に、コンクリート打放しの美しいアトリエがある。安藤忠雄建築研究所。ここで、建築家・安藤忠雄は、総勢25名のスタッフと、世界中から舞い込む案件に日々格闘している。吹き抜け5階建ての所内には、スタッフに指示をする、彼の威勢のよい声が響き渡る。

——このアトリエは、いつ建てられたのですか。

安藤 ここは、もともと住宅として設計した建物なんです。1973年、まだ建築家として駆け出しの頃に、

友人の依頼を受けて手がけた、私の処女作です。

五軒長屋の一棟を建て替えて家をつくってほしいという依頼だったのですが、これが実に難題でした。長屋は梁や基礎部分がすべてつながっているから、一部を切り離せば、隣りが傾くかもしれない。スタートとしては絶望的な状況です。着工前、いろんな人から「傾いて倒れたらどうするんだ」と心配されました。

でも、当時の私は「倒れたら倒れたときだ」と思っていました。若かったんでしょう、失敗が怖くなかったんです。それを引き受ける覚悟も

ありました。

——なぜそう思えたのでしょうか。

安藤 10代後半で出会った、具体美術協会(※1)の若い芸術家たちの影響だったのかもしれませんが。彼らは先が見えない中で、自由に、そしてエネルギーに自分の表現をしていて、私は衝撃を受けました。芸術には自由がある——そう感じました。と同時に、自由に生きるには、相当の覚悟が必要であるということも彼らから教わりました。

——そのように覚悟してつくられた住宅を、後に安藤さんがアトリエとして使われることになるんですね。

「芸術には自由がある。 しかし、その自由には覚悟がいる。」



1階から5階までが吹き抜けになっており、上部は全面トップライト。建物の奥まで自然光が照らす。



吹き抜けの「底」に安藤さんのデスクがある。ここから叫べば、各フロアにいるスタッフへ声が届く。



安藤さんが元プロボクサーだというのは有名な話。所内のあちこちにグローブが飾られている。



写真家・杉本博司氏の作品。「建築家の脳裏に『光の教会』が生まれた瞬間」をイメージしているそうだ。

安藤 しばらくして、依頼主から「双子が生まれて手狭になってしまった」と相談を受けました。そこで、私が買い取り、仕事場として使うことにしたんです。

住宅として設計したから、やはりアトリエとしては使いにくい。それに事務所の規模も徐々に大きくなっていったので、何度も改修・増築を重ね、1991年にはすべて取り壊し、新たに設計してつくり直しました。

自分のアトリエですから、建築の可能性を探るために、ここではさまざまなことを試しましたよ。どこまで自由につくれるか実験したいと思って。自分のお金で設計のトレーニングをしたようなものです(笑)。——安藤さんが建築家としてのキャリアをスタートされてから、もうすぐ50年になります。今年9月には、その仕事を振り返る大規模な個展(※2)を開催されるそうですね。

安藤 展覧会では、「光の教会」(※3)を、美術館の野外展示場に原寸大で再現します。コンクリートで建てるんですよ。すごいでしょ。

1989年につくった実際の「光の教会」は、十字のスリット窓の部分にガラスが入っているのですが、今回の展示ではガラスを入れません。ガ

ラスがないほうが光や風が入り、祈りを捧げる人たちの気持ちか、一つになると思うんです。当時、クライアントにもそう提案したのですが、猛反対にあってしまいました。あれからずっと心に引っかかっていたのが、30年越しにようやく実現するわけです。

この展覧会は若い人に見てもらいたいと思っています。「20歳以上は入場お断りの日」をつくらうかと話しているぐらいなんです(笑)。次の時代をつくっていく子どもたちが私の仕事を見て、何か感じてくれたら、こんなにうれしいことはありません。ぜひ遊びにきてください。

あんどう・ただお

1941年大阪府生まれ。独学で建築を学び、69年に安藤忠雄建築研究所を設立。79年に「住吉の長屋」で日本建築学会賞、93年 日本芸術院賞、95年 プリツカー賞、2005年 国際建築家連合(UIA) ゴールドメダルなど受賞多数。10年 文化勲章を受章。11年 東日本大震災遺児のための育英資金「桃・柿育英会」を設立。支援を続けている。

※1 具体美術協会

画家・吉原治良を中心に1954年に兵庫県芦屋市で結成された前衛美術集団。パフォーマンスやインスタレーションなど、先鋭的な活動を行った。

※2 「安藤忠雄展—挑戦—(仮題)」

国立新美術館(東京都港区)の開館10周年を記念して開催される過去最大規模の展覧会。会期は2017年9月27日(水)～12月18日(月)。

※3 光の教会

大阪府茨木市にある教会。極限まで削ぎ落とされたシンプルな構造の建築。コンクリートの壁に切り込まれたスリットからは十字架型の光が差し込む。



特集

発想や構想の力を 育てる

生徒たちの「発想や構想の能力」を伸ばすために、
どのような手立てが考えられるでしょうか。
今回は、小さなスケッチブックを生徒たちに持たせ、そこから発想させたり、
構想を練らせたりしている、鈴野江里先生の授業をご紹介します。

撮影 鈴木俊介

授業レポート

「今の私」を表現しよう！

神奈川県鎌倉市立岩瀬中学校

鈴野江里^{すずのえり}先生 × 1年1組 (生徒数 34名)

「発想ノート」と名付けられたB6判のスケッチブック。鎌倉市立岩瀬中学校の生徒たちは、必ずこの小さなノートを携えて、美術室へやってくる。

発想ノートは、生徒が日常生活の中で自分が「美しい」と感じたものを記録したり、作品制作のアイデアをかき留めたりするノートだ。

鈴野先生は、生徒たちに作品の主題を考えさせたいとき、表現の構想を練らせたいときなどに、適宜、このノートを活用する。

今回の授業でも、もちろん発想ノートを使う。題材は、『「今の私」を表現しよう！』。中学1年生の3学期に、今の自分を見つめ、自分自身を抽象的な立体作品として表現するという内容だ。

先生はまず、冬休み前に「発想ノートに、『私を構成するもの』を集めよう」という課題を出した。3学期最初の授業は、集めてきたものについて交流することから始まる。

第1時 私って何だろう

「みなさん、冬休みに『私を構成するもの』を発想ノートに集めてきてくれましたよね？ どんなものを集めてきたのか、今日はその報告会をします。まず4人グループで、報告し合ってください。話を聞いてわからないことがあったら、どんどん質問

してね。ではスタート！」

先生が元気よく切り出すと、生徒たちは、分厚くなった発想ノートを広げ、順に報告していく。

部活のユニフォームやシューズの写真を貼っている生徒や、グラウンドや図書館など自分のお気に入りの場所の写真を貼っている生徒、好きな食べ物や色などの「好きなもの」をリストのように集めている生徒、家族や友達など、自分の周りの人たちをマッピング形式でまとめている生徒など、発想ノートには、さまざまな「私を構成するもの」が集めら



「『発想ノート』に集めたものを報告し合いましょう」と鈴野先生。

れている。

生徒たちは「何これ？すごいね」「かわいい！」などと、盛り上がり、身を乗り出して友達の報告に聞き入っている。中にはそれぞれのノートを交換して見せ合うグループも。

先生は「友達の報告を聞いてどうでしたか？ 自分がノートに集めたものを、ちょっと分析してみましょうか。自分はどういうものに惹かれるのか、集めたものに共通点はあるのか……とかね。それで、自分ってどんな人なんだろう、って考えてみてほしい。次の時間から、制作に入りますよ」と告げた。



「発想ノート」を見せ合う生徒たち。好きな食べ物、部活の仲間、家で飼っている犬など、生徒たちは思い思いの「私を構成するもの」を集めてきた。

第2時 見えないものを形にする

「これから、『今の私』を、紙粘土を使って表現してもらいます。みんなはもうすぐ2年生になりますね。きっと期待や不安があることでしょう。でも、期待や不安な気持ちって、もっと成長したいとか、よりよく生きたいっていう表れなんだと思うよ。そういう今の気持ちや、前の時間で『自分ってどんな人なんだろう』と考えたことなどをふまえて、『今の私』を表現してみましょう」。

先生はそう切り出し、紙粘土を配付した。生徒たちはさっそく袋から取り出し、こねたり、伸ばしたりしている。

「じゃあ、まずみんな『悲しい気持ち』をつくってみよう」と先生が言うと、生徒たちは、涙のしずくや、



粘土の可塑性を楽しみながら、形を考える生徒も。

ハートに穴が空いたマーク、「悲」という文字などをつくり始める。

先生は、いったん手を止めさせ、「マークや文字をつくっている人が多いけど、どう思う？」と問いかけた。すると、ある生徒が「自分で感じた『悲しい気持ち』ではないんじゃないか」とつぶやいた。

「すごくいいことを言ってくれたね。マークや文字をそのまま形にするのではなく、『目に見えない』自分の気持ちを形にするんだよ」と先生が言うと、生徒たちはちょっと困ったような表情を浮かべる。

「難しいかもしれないけど、今の気持ち、今の私を形にしてみしてほしい。発想ノートに思ったことを書いたり、粘土をさわったりしながら考えてみ

よう」と、続けた。

生徒たちは「うーん、難しい……」「どうしよう」と言いながら、発想ノートを見返したり、粘土をさまざまな形に変えたりしながら、「今の私」を表現しようと模索している。

授業の最後には、相互鑑賞の時間が設けられ、生徒たちは、自分の作品を机に置き、教室を自由に動き回った。「今の私」を形にするという難題を突き付けられた生徒たちは、他の人がどのような形をつくっているのか興味津々。友達の作品を真剣な表情でのぞき込んでいる。

先生が何人かの生徒に、どうしてその形をつくったのか、皆の前で発表させたところで、終業のチャイムが鳴った。



制作途中で、何度も相互鑑賞の時間が設けられた。

指導計画

準備するもの 生徒：筆記具、発想ノート

教師：紙粘土、粘土板、アクリル絵の具、デジタルカメラ、ワークシート、書画カメラ、電子黒板

学習目標 ●自分の発想ノートや他者の作品などから感じ取ったことや想像したことをもとに主題を生み出し、構想を練ることができる。
●主題を表現するために、形や色を工夫して作品を制作することができる。

評価規準 ●今の自分を表現することに関心をもち、主体的に構想を練ったり、画材を生かして使おうとしたりしている。(美術への関心・意欲・態度)
●自身が置かれている環境や中学校生活での出来事等を見つめて、感じたことや想像したことをもとに、どう表現するか構想を練っている。(発想や構想の能力)
●意図に応じて画材を生かし、創意工夫して表現している。(創造的な技能)
●他者の作品から意図や表現の工夫などを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げている。(鑑賞の能力)

授業展開(全7時間) 生徒の活動

第1時【導入】

冬休みの課題（発想ノートに「私を構成するもの」を集める）を交流し、今の自分を見つめる。

第2～6時【制作】

- 発想ノートを振り返ったり、相互鑑賞したりする中で、どのような「今の私」を表現するか構想を練る。
- 「今の私」を表現するため、形や色を工夫して制作する。

第7時【鑑賞】

他者の作品を鑑賞して、そのよさを味わう。また、作者の意図を聞き、自分の見方や感じ方との違いを知る。

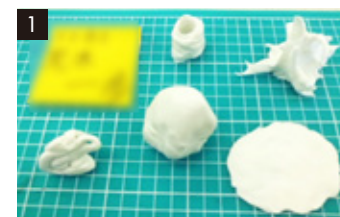
第3～5時 「私の形」を探る

授業の冒頭で、先生はグループに1台ずつデジタルカメラを渡した。

「引き続き『私の形』を考えていてほしいと思います。キーワードは『つくり、つくりかえ、つくる』。この形を残しておきたい、と思ったら、カメラで撮影してください。そして、またつくりかえる。どうやってつくりかえれば、『今の私』の形になるんだろう。難しいことだけど、これから3時間、『私の形』を探してってくださいね。その後、色を塗って作品を完成させますよ」。

先生がそう告げるやいなや、生徒たちは粘土をこね始めた。粘土を伸

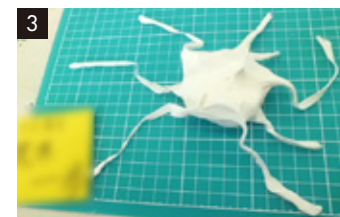
「私の形」の変遷 Aさん編



初めは「嬉しい」「寂しい」などの自分の感情を一つずつつくって並べていたが、「何かが違う」と感じていた。



それぞれの感情は関連していると思い、線でつないだが「感情をつなぐ線がただの『道』に見えてしっくりこなかった」。



中心に「自分」を置き、そこから感情が生まれ、伸びるように表現したら「これだ」と思った。



粘土でつくった「私の形」をデジカメで撮影。

ばしたり広げたりする中で、自分の気持ちにフィットする形を見つける生徒もいれば、発想ノートにアイデアスケッチを描き、計画を立てて形をつくっていく生徒もいる。

撮った写真は、先生にプリントアウトしてもらい、発想ノートに貼り付け、改善点などを記入する。1時間のうちに、試行錯誤しながら何枚も写真を撮る生徒がいるいっぱい、じっくりと一つの形をつくりあげ、「これだ」と思う写真を1枚しか撮らない生徒もいる。発想ノートを見ると、生徒たちの「私の形」を探るプロセスがわかり、興味深い。例えば、Aさん。彼女は最初、さまざまな感情をそれぞれ独立した形としてつくり、配置していた。しかし、試行錯誤の末、最終的には大きなニューロンのような形をつくった（左写真参照）。

授業の中では、適宜、相互鑑賞の



中には「吹き流し」で色をつける生徒も。

時間が設けられる。それによって、生徒は友達の形からも影響を受けながら、自分の表現を探っていった。

第6時 「私」ってどんな色?

本時から着彩に入る。

「どんな色をどう塗ったら、『今の私』を表せるかな。発想ノートに試し塗りをしながら考えてみよう」。

鈴野先生はあえて、絵の具の色数をたくさん与えない。生徒たちは、混色のしかたを工夫する中で、「自分の色」を見つけていく。

また、それぞれに塗り方にも工夫を凝らしている。ストローで「吹き流し」をしている生徒（Tさん：作品はP10参照）がいたのも、どうしてその技法を使ったのか尋ねると、「自分は周りの人たちの気持ちに支えられている。そのさまざまな人の気持ちを吹き流しの線を重ねることで表したかった」と答えた。

次時では、いよいよ完成した作品を全員で鑑賞していく。



特集
発想や構想の力を育てる



自分の作品を説明するI君。



I君の作品

第7時 「今の私」を鑑賞する

「今日は、みんなの作品を鑑賞します。いろいろな見方があっていいから、自分の見方や感じ方を大事にしてね」。先生はそう投げかけ、最初の10分で相互鑑賞をさせた。

その後、「これから、みんなで一つの作品を鑑賞します。その後に、作者自身にも作品に込めた思いを聞いてみようと思います」と言い、書画カメラで、I君の作品（上写真参照）を電子黒板に映し出した。

先生「この作品、どう感じた？」

生徒1「壺みたい」

生徒2「外は明るい色だからうれしい気持ち、中は暗い色だから悲しい気持ちを表していると思う」

生徒3「外から見たら明るいんだけど、本当は暗い気持ちをもっている」
先生「それは色だけで感じたことなの？ 形からも感じたの？」

生徒3「形からも感じました。こういう形（両手でチューリップのような形をつくる）で、横からは中が見えないようになってるから」

先生「何か隠されている感じがしたんだ」

生徒4「周りの明るい色は、自分がみんなに見せている性格。でも中が暗いから、みんなに見せられないような気持ちをもっている」

先生「なんで、この色にしたんだろう。作者に聞いてみたいよね」

生徒一同「聞きたい！」

みんなの「聞きたいコール」を受け、I君が教壇の前に立った。

I君「僕は、部活や勉強でもう少し積極的に行動したいないつも思っていて。その消極的な気持ちを、この暗い色で表しました。だから、悲しい気持ちではないんです（笑）」

生徒一同 笑い

I君「消極的な気持ちを包んで、新しい気持ちに変えていきたいと思って、包むような形にしました」

先生「さっき、みんなに『暗い気持ちなんじゃないか』って言われていたとき、どう感じた？」

I君「自分以外の人が見たら思うかなと。予想はしていました（笑）」

先生「みんなの見方と作者が考えていたことが違うって、面白いね」

鑑賞者が感じたり考えたりしたことは、必ずしも作者の意図とイコールではない。生徒たちはそのおもしろさも感じ取ることができたことだろう。最後に、授業の締めくくりとして、先生はこう語りかけた。

「目に見えない今の気持ちや今の私を表現するって、難しいことだったと思います。でも、みんなは懸命に考えて、形にしてみました。何もなかったところからアイデアを生み出すって、すごく大事な力なんだよ。その力は、これからのみんなの生活をもっと豊かにしていくと思います」。

生徒たちは、自分の作品を手にしながらか、先生の目をまっすぐに見て、深くうなずいていた。

どう表現したら「今の私」になるのかな



Sさん

粘土をさわる中で、自分に合う表現を見つけていく

Sさんの「発想ノート」



冬休みの課題では、「私を構成するもの」として、部活で使う楽器などを集めた。



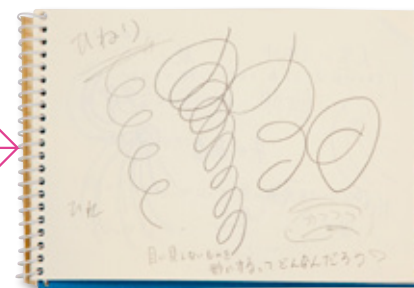
「ぐるぐると考えごとをするのが好き」。そんな自分を、粘土をねじってからませることで表現したいと思い、さまざまなねじり方を試す。



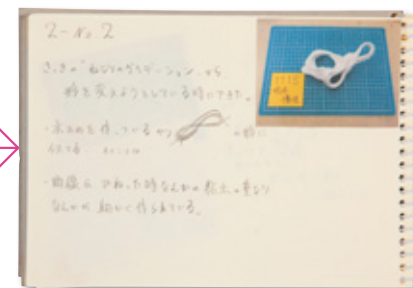
途中で「粘土を伸ばすと繊維が透ける。その感じが今の気持ちに合っている」と思い、伸ばす表現もいろいろ試した。



ねじる、伸ばすという表現を両方使うことに。「考えごとをするのが好きで、ちょっと優柔不断な私」を、ぐるぐるした形と淡い色で表した。



粘土をどうひねれば「今の自分」を表現できるのか。迷いつつ描いたスケッチ。



制作プロセスを丁寧に記録し、次の表現につなげていく。



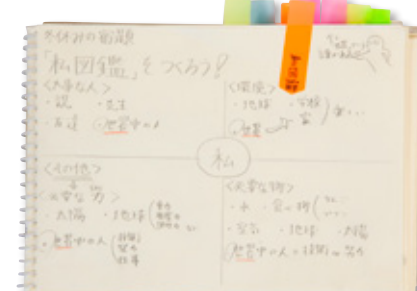
試し塗り。「人に影響されやすい自分をパステルカラーで表したかった」。



N君

ノートにプランを練って、自分を表現していく

N君の「発想ノート」



冬休みの課題では「大事な人」など、自分を構成するものをマッピングで表した。



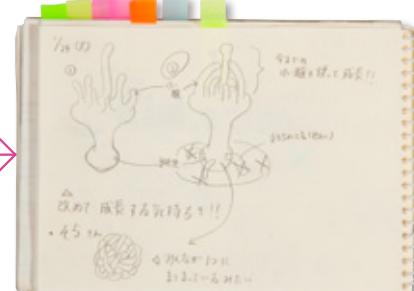
「未熟だけどもっと成長していきたい自分」を表現すると決める。相互鑑賞した後、友達の作品のよい部分を、自分の作品に生かそうとメモ。



発想ノートを見ながら、慎重に色を重ねていく。着色している途中も、ノートに気づいたことなどをかき留める。



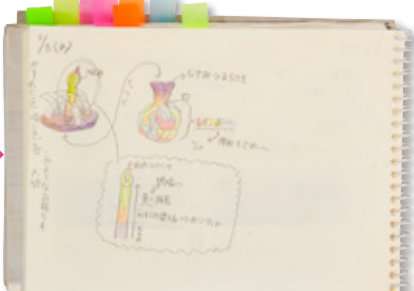
土台のカラフルな部分は「周りの人の支え」を表し、紫の部分は「悩み」、上部分は成長していく自分。先をピンクにして「未来」を表した。



形をどうするか、アイデアを入念にかき留める。まるで作品の設計図のようだ。

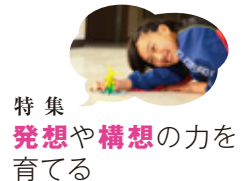


試作の中で、作品の先端をつばみのようにして、成長する気持ちを表すことに決めた。



「かすれた色」「グラデーション」など、着色のプランを、細かくメモする。

※N君の作品をクラス全員で鑑賞したときの模様を、光村図書ウェブサイトに掲載しています。「[光村図書ウェブサイト](#)>みつむらweb magazine>美術の授業」



特集
発想や構想の力を
育てる

いろいろな「今の私」

Tさん

周りに 支えられている私

自分の人生を表したいと思い、いろいろな道が伸びている形にしました。黄色などの明るい色は、ポジティブな気持ちで、ブルー系はネガティブな気持ち。「吹き流し」の技法を使って、いろいろな色を重ね、たくさんの人たちの気持ちに支えられていることを表しました。



Nさん

表の自分と 裏の自分

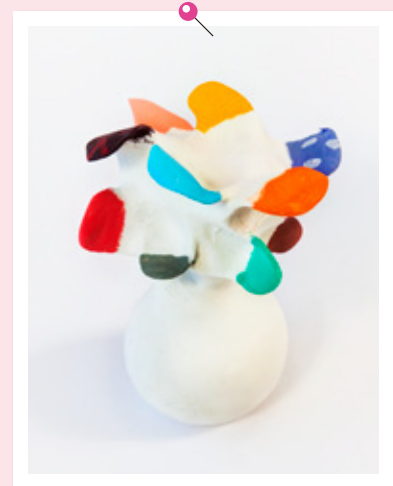
周りには明るくふるまっているけど、本当は悩みがあることを、表と裏で表そうと思いました。表は「外向きの自分」で、丸い形にし、明るい色を塗りました。裏は「自分の内面」。悩んでいる気持ちを、粘土をひっぱってちぎって表し、色も暗めのトーンにしました。



N君

自由に生きたい僕

自由に生きたいという気持ちを表そうと思って、粘土を自由に板の上に広げていきました。すると、所々に穴が空いたので、そこに自分の感情を表現しようと考えました。色は、自由さを表すため白地部分を多く残しました。黄色は喜び、紫色は悩み、赤色は怒りを表しています。



Kさん

さまざまな気持ちが 交錯する 未完成な私

土台の部分は「自分の根っこ」。花びらのように広がる突起は、「自分の感情」。オレンジ色は「楽しい」、紫色は「怒り」など、感情をさまざまな色で表現しました。未完成な自分を表すため、土台部分に色をあえて塗らず、白地のままにしています。

※その他の生徒作品は、光村図書ウェブサイトに掲載しています。「光村図書ウェブサイト」>みつむらweb magazine>美術の授業」

授業を終えて 「発想ノート」を活用して

本題材のポイントは、自分という存在を見つめ、表したいものを見つける「主題の生成」にあります。生徒によってはかなり難しく感じるかもしれません。

そこで、前もって自分を見つめる機会（発想ノートに「私を構成するもの」を集める）を与え、主題の生成でつまずく生徒の手立てとしました。適宜、相互鑑賞を取り入れたことも有効だったと思います。

また、生徒たちは、制作途中の作品を写真に撮り、プロセスを発想ノートに残しました。このことも表したい主題をどう具現化すればよいのか、構想を練るための助けになったことと思います。

今回、初めてこの題材に取り組んだのですが、指導案を考えるにあたり、多くの先生方からアドバイスをいただきました。生徒たちは相互鑑賞を通して「自分以外の誰かの存在」が自己の活動に大きな影響を与えることを感じたと思いますが、私も、指導案を練っていく際、まさに同じ気持ちでした。

これからも、共に学び共に生きることを生徒が実感できるよう、私も周りの方々のアドバイスを仰ぎながら、授業を考えていきたいと思っています。

鈴野江里
すずの・えり

神奈川県生まれ。
和光大学人文学部芸術学科卒業。
鎌倉市立岩瀬中学校教諭。鎌倉市の公立中学校、
横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校を経て、2017年4月より現職。



光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、
今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。
「美術による学び研究会」会長。
高知大学大学院教育学研究科教授、
帝京科学大学教授を務める。
『五感をひらく10のレッスン』（美術出版社）、
『私の中の自由な美術』、
『風神雷神はなぜ笑っているのか』（光村図書）
など著書多数。
NHK高校講座「芸術（美術）」を監修。
光村図書中学校『美術』教科書の著作者でもある。

発想・構想を 可視化する

今回の授業は指導案を作成する段階から関わり、授業の補助もするなどして、楽しく参観させていただきました。

鈴野先生は生徒に、発想ノートを持たせ、「私を構成するもの」を集めようという課題を、冬休みの間に出していました。発想ノートは生徒が主体的に情報を集めたり思索したりするノートで、4月から1年を通じて行われている取り組みです。授業が始まってから「さあ発想しよう」と促すのではなく、発想ノートを通して、日頃から発想のアンテナを鋭敏にしておくことは大切なことです。

授業ではデジタルカメラによる作品撮影と相互鑑賞の活動をお願いしました。

デジタルカメラを使ったのは途中経過を記録するためではありません。今回の授業では粘土を用いるので、つくり、つくりかえる過程を生徒に意識させる必要があることと、変容していく作品の形を見ることを通して、自分の発想・構想のあり方や方向性を省察させるためなのです。いわば発想・構想を可視化して新しいものを生み出す資源として、デジタルカメラを用いたのです。

撮った写真はプリントされ、発想ノートに貼られます。写真を見ながら生徒は自分の表現を振り返るとともに、この後どうすればよいかを考え、スケッチしたりメモを記したりして次の段階に進みます。発想ノートもまた、発想・構想を可視化する資源だと言えるでしょう。

相互鑑賞も、発想・構想を可視化し、表現の手がかりや支援となる活動です。

第2時では見えないものを表す形のイメージが湧かず、粘土をつまみ出したり広げたりしたりして変化を楽しむことに留まる生徒の姿が見られました。そこで相互鑑賞を取り入れました。友達の多様な発想を見ることから、自分にはない発想や表し方を感じ取らせることがねらいです。この後も適宜、相互鑑賞を行い、生徒たちは友達の発想から学びながら自らの発想を磨き、表現を工夫していったのです。

授業は、第6時から着彩に入りました。ここでも相互鑑賞を取り入れましたが、これは発想のためというよりは着彩の方法や技法の多様性を学ぶための鑑賞です。一見、同じように見える鑑賞の活動でも生徒が学ぶ内容は違うので、そのねらいを明確にして指導する必要があります。

これらの意図的な鑑賞の活動は、美術科における生徒の表現と、作家の制作活動との差異を明確に示しています。授業の中で生まれる作品とは何か？それは「学びの形」なのです。

粘土を手にとった最初感覚から始まり、形をつくってはつくりかえ、鑑賞を通して発想や技法の多様さを学び、自分の表現に生かし完成の姿に至るその一連の過程のすべてが、生徒にとっての「学びの形」なのです。



特集
発想や構想の力を
育てる

作家の肖像

第 11 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



佐藤忠良

1912-2011

さとう・ちゅうりょう
1912年宮城県生まれ。少年時代を北海道で過ごす。東京美術学校(現 東京藝術大学)を卒業後、39年に新制作派協会(現 新制作協会)彫刻部を創立し同協会を舞台に活躍。44年に兵役に招集、終戦後のシベリアで約3年、抑留生活を送る。帰還後に制作を再開し、81年にパリの国立ロダン美術館で日本人初の個展を開催。90年に宮城県美術館に佐藤忠良記念館が開館。98歳で死去。

心地よいアトリエ

9年前の正月明けに、彫刻家・佐藤忠良さんのアトリエを訪れました。私が勤める美術館で、佐藤さんの個展^(※)を開催したいと思い、その依頼が主な目的でした。

当時、佐藤さんは96歳。もともと記憶力のよい方ですが、さすがにお年なので、話が飛んだり、記憶違いがあったりして、そのづどお弟子さんにやさしく指摘され、「そうか、そうか」とにこやかに答えていらっしゃいました。皆で楽しい時間を過ごしたことをよく覚えています。

私は仕事柄、さまざまな作家の方の仕事場へ伺いますが、佐藤さんのアトリエがいちばん好きです。道具が無造作に置かれ、整理整頓されているわけではないのですが、その具合がじつにいい。包まれるような居心地のよさがあります。それは、お人柄をそのまま表しているような気がします。

佐藤さんは北海道夕張市で幼少時代を過ごしたのですが、私も北海道出身。ときどき「サカイ君、北海道訛りで話そうか」と、他の人がいるところで、私にしかピンとこない“マギリ”(包丁)などと言う。ユーモアにあふれた方でした。親子ほど年の離れた私に対しても、昔からの友人のように気さくに接してくれたことは、忘れられません。

真実を語る彫刻

佐藤さんの作品を語るうえでは、何といっても終戦後にシベリアで3年間、捕虜として抑留されていたことを忘れてはなりません。想像を絶する過酷な体験が、その後の作品づ

くり大きな影響を与えたからですね。「極限の中での人と人との真情を何度美しいと思ったか知れない」と自著『つぶれた帽子』でも述べていますが、長い捕虜生活から解放された後になって、彫刻で人間の真の美しさを捉えようとしています。

その作品は、ときに「きたなづくり」と評されることもありましたが、当時、彫刻といえば、目鼻立ちのはっきりした美しい顔がつくられることが多かったなかで、佐藤さんは、日本人らしい顔立ちの市井の人々をモデルにしたからです。ただ造形的に美しい彫刻とはまったく違う、「真実を語る彫刻」なのだと、私は思っています。

「触覚性」を大事にする人

佐藤さんは、「触覚性」を大事にした彫刻家です。生まれたばかりの赤ん坊が触覚で世界を捉えようとするように、触覚は人間のあらゆる感覚の土台になるもの。佐藤さんはよく、「最近の若い人は、触覚性が希薄になっている。身体で触って、自分の物差しをつくっていかないといけない」と話していました。今は、あらゆることを触覚より視覚で判断しようとする時代です。そのような時代だからこそ、佐藤さんの作品には、私たちの心を掴んで離さないものがあるのかもしれない。(談)

※「ある造形家の足跡 佐藤忠良展」(2010年12月～2011年3月)。
世田谷美術館で開催された、佐藤氏の生前最後となった展覧会。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



左上／ふざけっこ

ブロンズ 高さ99cm 1964年
彫刻家・朝倉文夫の孫の亜古がモデル。
自身に孫ができるまで、子どもをモチーフにした作品のほとんどは、彼女がモデルとなった。(撮影:上野則宏)

右上／ラップ帽

ブロンズ 高さ48.5cm 1982年

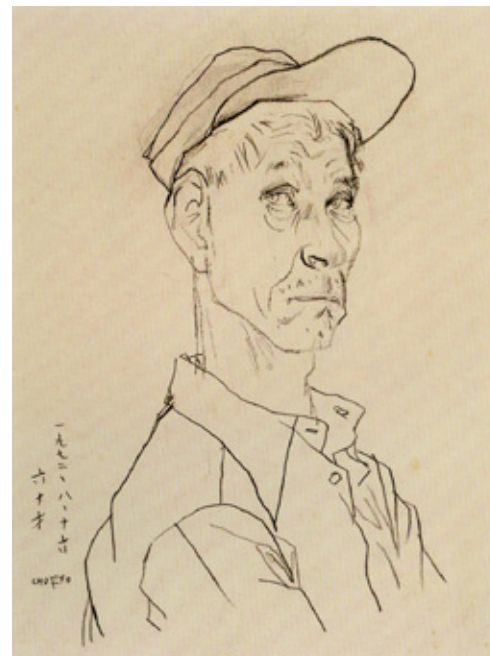
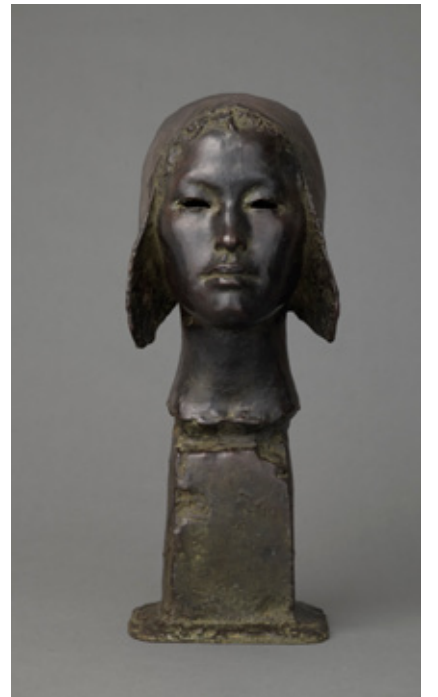
右下／帽子のチコ

ブロンズ 高さ35cm 1985年
身に着けるものによって人間の輪郭が変化することに彫刻表現の可能性を感じ、帽子を被った人物像を多く残した。(撮影:上野則宏)

左下／自画像

鉛筆 30.9cm×23.1cm 1972年
もともと画家を目指していた佐藤氏。折にふれ、自画像を残している。これは60歳のときに描いたものである。

(すべて宮城県美術館蔵)



美術部へようこそ! 埼玉県^{あげ お}上尾市立西中学校

学校や地域に貢献する活動を大切にしている西中学校の美術部。
入学式のための黒板アートの制作を中心に、その活動についてご紹介します。

入学式の“黒板ジャック”

緊張でいっぱいの入学式の日、教室に入って真っ先に目に飛び込んでくるものが、カラフルな絵と歓迎のメッセージで彩られた黒板だったとしたら——。上尾市立西中学校の美術部が毎年取り組んでいるのが、入学式を迎えた1年生のための黒板アートだ。1年生の各教室の黒板を、絵とメッセージで“ジャック”する。

きっかけは3年前。小・中学校などを訪れて黒板アートを制作する大学生の活動が、テレビで紹介された。絵を見た部員たちは、顧問の児崎^{こさき}昂子先生に提案した。「自分たちもやってみたい!」と。

先生は当時を振り返る。「自分たちのアートをつくる。そんな生徒の自主性を尊重したい。これが私の願いです。だから、この提案には大賛成でした。でも、黒板アートは私も未経験。彼らは、自ら描き方を発見して、技法を身につけていきました」。

新しく加わる後輩たちにエールを送りたい。その思いが伝わり、入学式の“黒板ジャック”は、1年生やその保護者に喜びと感動をもたらす恒例の取り組みとなった。

美術部で、心の成長を

7クラス分の黒板アートを、3～4人のグループで分担して制作する。新3年生と2年生の合同グループで

は、生徒どうしの教え合いが自然に生まれる。仲良く、お互いに高め合っていく集団であること。これは、児崎先生が掲げる美術部の方針だ。

そしてもう一つ、大切にしているのが、学校や社会に貢献するという活動。同校では、美術の時間に生徒が制作した作品を、廊下の壁面などのいたるところに展示する「学校美術館プロジェクト」という取り組みが行われている。美術部は、その展示活動も担当する。さらに学校外に目を向けると、地域のボランティア活動として、盆踊りや安全講習会の告知ポスターの制作も、毎年担う。

「作品制作と並行してこれらの活動をこなすのだから、忙しい毎日です。でも、生徒には、社会に役立つ経験をさせたいと思っています。地域の人からの感謝や賞賛は自信につながります。よい仲間づくりとともに、心の成長も遂げていく。美術部はそんな場でありたいんです」と、先生は語る。

こうした共同制作の活動によって、一人一人の発想力や表現力もまた、磨かれていくのだという。2年生の部員は、「みんなで一つのものをつくるって大変。でも、自分では思いつかないアイデアをもらえることもあるんです。それが共同制作のいいところ」と、うれしそうに話す。

思いのこもった黒板アートは、今年も多く笑顔を生んだことだろう。



上／部員は全部で20名。
校歌の歌詞からイメージを広げてデザインを考える。
写真は、「宇宙へ開く限りないこの空の下」の部分をもとにデザインされた黒板。
左／上とは別の黒板。
地球にうっすらと浮かぶ雲は、筆でぼかして描く。
右／使用するチョークの色数は10色程度。複雑な色は、重ねて塗ったり粉を混ぜたりして表現する。

教室を飛びだして

「ミチバタ版画」ワークショップ(青森県青森市)

アートと音楽にあふれたまちづくりに取り組む団体「アートでオン!」。2014年に行われた版画ワークショップの内容を中心に、その活動をご紹介します。



ぶたや津軽三味線などの伝統、^{むなかたしこう}棟方志功ら芸術家を生んだ自然や文化。そんな豊かな背景をもつ青森市が、いつでもアートと音楽にあふれたまちになるようにと取り組む団体、それが「アートでオン!」だ。

発足は、2013年。以来、市とともに、市民の文化・芸術に関わる活動への助成、イベントの企画・運営などを行う。「私たちが目指すのは、アートと音楽にあふれたまちづくり。それには、次代を担う子どもたちを巻き込むことも欠かせません」と、事務局の菊池^{きくち}孝康さんは語る。

例えば、3年前に開催された「ミチバタ版画」ワークショップ。青森市を中心に活躍する版画家の指導のもと、市内中学校の美術部員が彫った版木から帆布に刷り出し、地元商店街の日よけを制作した。

刷るときに使ったのは、道路舗装用のロードローラー。青空の下で行われたこの大がかりな版画は、参加した中学生たちに大きな刺激を与えたという。さらに、完成後の日よけは、商店街を歩く市民の目を楽しませた。

「今後もこうした取り組みや助成事業を続け、次世代と関わっていきたい。そして将来的には、市民の芸術的活動を支援するアーツカウンシルのような役割を担えたら」と、菊池さん。これからも、10年先、20年先の青森市を見つめた活動が、アートを通してまちづくりを担う子どもたちを育てていくことだろう。

アートでオン!
<http://art-on.aomori.jp>



「この子たちは、地域の子どもたち」。商店街の人たちが子どもを見る目も変わった。

放課後

第 11 回

A R T



第 11 回

「^か^{えん} 火焰土器」

粘土 高さ29.5cm 縄文時代中期
馬高遺跡出土(新潟県) 馬高縄文館蔵(新潟県)

メイド・イン・ジャパンの原点

初めて火焰型土器を見た時、「これは、宇宙人が作ったモノに違いはない!」と思いました。そのぐらいの衝撃……。

今から5000年も前に作られたという事実! そして、下から上に向かってどんどん大きくなってゆく、その不安定すぎるシルエット! 脳みそみたい、全面に彫り込まれた溝! 鶏のトサカに似ていることから「鶏頭冠^{けいとうかん}」と呼ばれる先端の形状! どこを見ても、いわゆる“和風”とは程遠い、日本人離れしたデザイン! もはや「こんなモノを“人間”が作れるわけがない」と思い至ったのです。

1万年以上続いた縄文時代。その中期の数百年間、信濃川流域で作られた火焰型土器。正直、煮炊きをする器としては使いづらかったことは間違いないのに、実際に煮炊きをした形跡が残っている。どうしてあんな形なのか? ますます分からない……。

ところが数年後、長岡の馬高縄文

館で「火焰土器」^(※)を見学した後、実際に粘土で火焰型土器の制作を体験した時、気づいたんです。「これぞ、元祖メイド・イン・ジャパンではないか!」と。

実際に作ってみると、それはそれは難しく、気が遠くなるような制作工程が続くんですが、無心になって粘土ひもを一本一本貼り付けていくうちに、感じたことのない体験をしました。独創的すぎて、あたかも一人の天才アーティストが作ったかのように見える火焰型土器。でもその模様一つ一つに意味があって、その“様式”を厳格に守って作られていることが分かってくるのです。表面の凸と凹が対になっていて、四方全ての線が繋がり、やがて天に向かって上昇して行くエネルギーの流れ。“火焰型土器を作る”という行為は、“数億年の生命の歴史を辿る”ことに繋がる一体感がありました。

何とか完成した後、もう一度見に

いった本物の「火焰土器」は、数時間前に見たモノとはまるで別の姿をしていました。まるで生きとし生けるもの、全てに対する生命賛歌のような、5000年前のモノとは思えない、生き生きとした「火焰土器」。正に名人が作った作品の輝きがありました。この“ものづくりに対する真摯な姿勢”こそが、日本人のものづくりの原点なんだと思います。

今、3Dプリンターで作った「火焰土器」の超精巧レプリカを、さわって見ることができます。長岡に行かれた際には是非、実物を見てください!

※火焰土器

1936年に馬高遺跡で出土した土器に付けられた名称。その後、火焰土器に似た形状の土器が発見されるようになり、総称して「火焰型土器」とよばれるようになった。最初に出土したのは「火焰土器」とよび、他と区別される。光村図書『美術I』P42-43では、笹山遺跡で出土した火焰型土器を紹介している。

片桐 仁
かたぎり・じん

芸人、俳優、彫刻家。1973年 埼玉県生まれ。多摩美術大学在学中に小林賢太郎とコントユニット「ラーメンズ」を結成。エレキコミックとのユニット「エレ片」としても活動している。舞台・ドラマ・映画・ラジオ等で幅広く活躍する傍ら、粘土による造形作品を制作。2017年4月からは全国6か所のイオンモールにて個展「ギリ展」を開催する。NHK Eテレ『シャキーン!』にレギュラーで出演中。